

04 歌や踊りと口承文芸について

01 芸能について

一般に、「アイヌ民族の芸能」として知られるものは、各地域で神事の際や日常のいろいろな場面で親しまれてきた歌と踊り、楽器演奏などから、外来の要素を除いたものです。実際には、これがアイヌ民族の音楽の総体ではなく、これまで知られているだけでも、江戸時代には神楽や三味線、ロシア音楽などが部分的に取り入れられ、近代になるとさらに様々な外来の音楽が、在来のものとりまぜて楽しまれました。

今日では、新たに音楽や舞台劇を含めた多様な創作活動も行われており、世界に向けても発信しています。

歌には「座り歌」と踊りの伴う「踊り歌」があり、歌い方は、独唱や斉唱、輪唱、交唱などがみられます。良い歌い手は声の張りがよく高音と低音、節回し（ピブラートなど）を駆使し、変化に富んだ声で歌います。

《ウポポ》や《ヘチリ》という言葉は、歌と踊りを指します。数人でグループを作って《シントコ》と呼ばれる漆塗りの器の蓋を囲んで座り、蓋を叩きながら歌います。これらの歌は多彩な声の変化を楽しむことに主眼がおかれ、歌詞は固定的・抽象的で聞き手が自由に解釈する余地があります。

輪唱を《ウコウク》（互いに取る）と言い、一つのメロディが少しずつずれて歌われることで特徴的なハーモニーが生まれます。音頭取りが歌を次々と変え、それに反応して歌いつなぐ、歌の競い合いこそが座り歌の醍醐味です。こうして数10分以上にわたって歌い、また徐々に立ち上がって踊りに入っていくこともあります。

これに対し《ヤイサマ》や《ヤイカテカラ》と呼ぶ即興歌は家族や恋愛、思い出などをテーマにそって即興的に歌詞を作って歌います。独唱で旋律も歌詞も自由度が高く、直接的なメッセージを含みます。

歌や踊りの中には動物の鳴き声や動作を模倣したものが多くあります。ばったの動きをまねた《パッタキリムセ》、湿原で子育てする鶴の舞《サロルンチカプリムセ》、様々な鳥の舞《チカプリムセ》などはその代表と言えます。

02 文芸について

アイヌ民族の文芸には、書かれる文芸と口承文芸があります。明治になると、それ以前とは逆に日本語と文字の習得が奨励され、短歌や詩などの文学形式を取り入れた作品が作られるようになり、小説やエッセイなど今日も新しい作品がうまれていきます。こうした作品については、違星北斗の項などを参照してください（アイヌ民族の人物紹介 93 頁参照）。

ここでは主に、口承の文芸を紹介します。口承文芸には様々なものがあり、いくつかの区分が試みられてきました。ここでは、語りの目的と語りのスタイルによる区分を紹介します。

目的による区分ではA「語ることによって別な目的を達するもの」とB「語ることを楽しむもの」を分けます。Aには、「まじない」や「スピーチ」などがあります。まじないは、天候に働きかけたり、ちょっとした体調不良などに際して唱える言葉と身振りです。スピーチは相手にメッセージを伝えるもので、祈り詞（神にむけて）、会見の言葉（人に向けて）などがあります。雅語と呼ばれる韻文体で構成され、旋律のにせて唱えられることもあります。《チャランケ》（よく聞かれるアイヌ民族に関する単語 115 頁参照）もこれに類するものですが、利害対立が原因となって行われ、一方が論破されるまで応酬が続きます。

Bには「言葉遊び（なぞなぞ、早口言葉、鳥の聞きなし…）」、「歌謡（子守歌、労働歌、即興歌…）」、「伝説」、「物語」などがあります。

ストーリーを持ち、いわゆる「文学」といって思い浮かべられるのは伝説や物語でしょう。伝説は、きまった形式を持たないことも多く、内容は語り手・聞き手と直接的なつながりをもつ土地や事物についての伝承です。これに対し物語は、語りのはじめと終わりに決まった表現が用いられるなど定型性が高いことが特徴です。内容は、歴史上のどこかであったこととはされていますが、必ずしも語り手・話し手にとって身近なものとは限りません。

物語は自叙の形（私は～、私が～）を取るものが多く見られ、語りのスタイルで韻文（神謡・英雄詞曲）と散文に分けられます。アイヌ語の呼び名は地域差が大きく、例えば知里幸恵の『アイヌ神謡集』で知られる神謡は、登別など南西部では《カムイユカラ》と呼ばれ、東部や北部から《ヤンケモシリ》（樺太）では《オイナ》、様似など一部で《トゥイタク》と呼ばれます。

物語は歴史観や生活上の知識を伝えるものもありますが、エンターテインメント

でもあり、日常のくらしと物語の内容が完全に一致するわけではありません。また、奇想天外なストーリーも多く、破天荒で現実の倫理観からかけ離れた行動をする登場人物もいます。ストーリーすなわち人々の価値観そのものというわけではありません。また、東アジアからユーラシア大陸に共通して伝えられてきたストーリーもあり、それはアイヌ文学にも見られます。独自に生まれたものがすべてではなく、他の文化と共有してきたものが多くあると見ておくべきでしょう。魅力的な話は言葉や文化、民族のちがいを越えて多くの人に届くのです。

03 各地の伝説

カムイコタン（神居古潭：旭川市）

昔、カムイコタンに住んでいた魔神《ニツネカムイ》が、山の上から大岩を転げ落として石狩川を堰き止め、鮭の遡上を止めて上流に住むアイヌ民族を困らせました。

これを見ていた山の神が大急ぎで、《ニツネカムイ》の転がした岩の半分を爪で引掻いてこわし、どうにか水流れるようにしました。山に戻った《ニツネカムイ》はアイヌ民族たちが困っているだろうと見下ろすと、せっかくの岩を山の神がこわしているの、真っ赤になって怒り、山の神に襲いかかりました。

これを近くで見ていた《サマイクルカムイ》の妹が、空知に行っていた兄に大急ぎで知らせました。これを聞いた《サマイクルカムイ》は怒って駈け戻り、山の神に加勢して大岩を取り除こうとしたので争いになりました。《ニツネカムイ》はついにたまりかねて逃げ出しましたが、泥にぬかってしまいます。その足跡が《オラオシマイ》（鬼の足跡）、そのときに《サマイクルカムイ》が刀で切りつけた跡が、《エムシケン》（刀の傷）として残っています。さらに逃げる《ニツネカムイ》を追って《ハルシナイ》（食料のある沢）を過ぎて《パンケアウシナイ》（川下のオヒョウニレ群生する沢）の川口でとうとう首を切り落としました。《ニツネカムイ》の胴体はそこで大岩になって残っています。切り落とされた首はその対岸に飛んでサイクリングロード下に奇怪な形の大岩となってどかっと坐っています（ニツネカムイサバ魔神の頭）。《ニツネカムイネトパケ》（魔人の胴体）は、落石の危険防止のためとなっている。また、その前の川の中には低い岩が散らばっ

ており、これが魔神のあばら骨です。《サマイクルカムイ》は、《ニッネカムイ》が投げ込んだ大岩を取り除き、川には再び鮭が上れるようになりました。

出典：由良勇著

『カムイコタンからチュペッまでアイヌ語地名と伝説の岩』

イペタム・スマ（人食刀岩）と、アサムサクト（底なし沼）（上川地方）

昔、上川コタンの《コタンコロクル》（首長）の家に、一つの刀が《キナ》（ゴザ）に包まれて《カムイ・プヤラ》（神窓）の上に吊り下げられていましたが、代々先祖から「これは妖刀である。どんなことがあっても開いてはならない」と言い伝えられていました。

ところがある夜、怪しい光とともに妖刀は《カムイ・プヤラ》（神窓）から音もなく姿を消し、朝になると刀は何事もなかったように《キナ》（ゴザ）の中に収まっていました。このようなことが何日も続き、《コタン》（集落）では、人々が不可解な切り傷によって死ぬという事件が続きました。

途方に暮れた《コタンコロクル》（首長）が妖刀を山深くもって行って捨てても、カムイコタンの深みに沈めても、刀は家に戻り相変わらず人々を襲いました。

《コタンコロクル》（首長）は、《カムイ》（神）へ祈りながらも疲労のためいつしか眠りについてしまいました。すると、夢の中に、白髪の神と黒髪の神が現れてこう言ったのです。

「妖刀から《コタン》（集落）を守るには、《チュペッ》の《ホトウイエパウシ》（いつも大声で呼びつけている所）の崖下に沼があり、その岸に赤い岩がある。その大岩の下に《ヌサ》（祭壇）を設けて妖刀を祀って心こめて祈りなさい。そうすれば、私たちが助けよう」

早速、《コタンコロクル》（首長）は夢のお告げの通りに《ヌサ》（祭壇）を作り、刀を祀って命がけで祈りました。すると、ものすごい轟音とともに岩が二つに割け、沼には湧きかえって白波がたち、異様な気配が漂ったのです。そのとき、《コタンコロクル》（首長）が「この刀が《コタン》（集落）にあってはアイヌ民族が滅びてしまう。アイヌ民族のために、この魔力を水神であるあなたに預けるから、しっかりと預かっていただきたい。もしこの願いを聞き入れてくださるなら、この刀を投げ入れるから、今、風もないのに沼に立っている波を消して誓って下さい」と言って、刀の包みを沼に投げ入れました。すると、異様な気配はすっかり

なくなり、白波だと思っていたものは幾千としれぬ白蛇でした。それから、《コタン》(集落)には平和が戻りました。

夢に現れた白髪の神は竜神のお使い、黒髪の神は山の神のお使いであったことを悟った《コタン》(集落)の人々は、以後、この赤岩でお祭りをするようになりました。

そして妖刀を呑んだ沼を《アサム・サク・ト》(底なし沼)、赤岩を《イペ・タム・シュマ》(人食い刀の岩)と呼ぶようになったのです。

出典：由良 勇 著

『カムイコタンからチュプベツまでアイヌ語地名と伝説の岩』

まりも伝説(阿寒湖：釧路市)

昔、阿寒湖に《ペカンペ》(水・の上に・あるもの=菱の実)が群生していました。《ペカンペ》(菱の実)はアイヌ民族にとって、大事な食料でした。ところが、《トコロカムイ》(湖・の・神)は、《ペカンペ》(菱の実)が湖一面にはりつめると、湖が汚れて見苦しくなり、アイヌ民族が《ペカンペ》(菱の実)を取りにきて汚れるからと、《ペカンペ》(菱の実)を快く思わず、絶えず虐待しました。

《ペカンペ》(菱の実)は、「仲間を増やしてアイヌ民族の役に立ちたいから」と懇願しましたが、《トコロカムイ》(湖の神)に、にべもなく断られてしまいました。それで、《ペカンペ》(菱の実)は大いに怒って、そこら一帯の藻をかきむしり、それを丸めて湖の神向けて投げつけて、自分たちはさっさと塘路湖《トー・オロ》(湖・のところ)に引っ越してしまいました。その丸めた藻が、今日言うところのマリモ(鞠の形をした藻)となったのです。

(平成12年発行『久摺第八集』の中から、山本多助談として掲載されていたもの)

有珠山の噴火(有珠山：洞爺湖町・伊達市)

話者：遠島タネ(タネランケ)氏

昔から静かな大地、静かな村を領していました。ある日、地震が起こって大地が揺れるに揺れました。私は山の様子をみていましたが、何日も、何日も、地震がおさまらないので、村の住人である子どもや《フッチ》(おばあさん)、《エカシ》(おじいさん)たちを避難させました。しかし、《アブタ》(虻田)のかしら(村

長＝むらおさ）は「わたしが避難させた」と言っても村人を避難もさせないでいたのです。ところが恐ろしいことに真夜中に噴火が起り、熱湯が村中を飲み込み、岩とともに火が下り、《アブタ》の村を飲み込んでしまいました。村は破壊され、一人の人間も避難させなかったことから、全部消されてしまい何もかもが無くなりました。噴火が起きて《アブタ》の村から逃げ、海に逃げたものは、あわてて海へ飛び込み頭が焼け、海の底に潜ったものは哀れにも海水を飲んだのか腹を膨らませて死にました。死んだものたちが浜一面に引き上げられ、《ウソロ》（有珠）の村はひどく破壊され、めちゃめちゃに焼かれ、家は燃えた木片が半分ぶら下がり、跡形もなく燃えてしまったものもあって、《アブタ》の村はすっかり消えました。

そのようななか、《アブタ》の村、《フレナイ》（虻田）の村を治めるかしらが見つからないのを私は不思議だと思って、毎日、かしらを探しましたがわかりません。《フレナイ》（虻田）の住人で逃げきれたものたちも、かしらが生きているのか死んでいるのかわからないので、皆で泣いて《リミムセ》（叫び声）をしましたが、どうしたものか行方がわからないのです。そうしているうち、《ペペ》（ベンベ／豊浦）という村に逃げた人たちも自分の村に二人帰り、三人帰り、次々と村に戻りました。村へ戻ると《フレナイ》（虻田）の村のかしらが、生前の姿のまま山へ向きながら座っていました。座って神に祈っていたのです。アイヌ民族も和人もびっくりして口をおさえ、鼻をおさえ、哀れみました。和人が近くに寄って「かしらよ、達者でいたのか」と言いながら杖で突きましたが、そのまま座っています。灰だらけで座っているのです。いつ、焼けたのか、生きているものと同じように、かしらも奥さんも座っています。虻田の村がどうなったのかと心配したアイヌ民族たちや助かったアイヌ民族たちが泣きながら威嚇行進をおこないました。《ペペ》（豊浦）の村、《レブンケ》の村の焼け殺された人びとと全員の魂が、死んだ魂が神のところにいけるよう長老たちが神に語り、神に呼びかけました。

そうしていると、山（有珠山）を鎮めるために《ウェイシリ》の上から神が立ち上がりました。その神に続き《フレスマ》から《レブンケナ》から《ペペ》（豊浦）の岬からと、辺りの山の上、岬の上からたくさんの神々が立ち上がって山へ攻撃しています。稲光とともに宝刀が大きく揺れ、切り合ってもいるように神々が戦いました。山の神が弱まったらしく、何の音もなく地震もすっかりおさまりました。

《アブタ》や《ウソロ》（有珠）の村も噴火ですっかり消えましたが、新しいか

しらが仲間を分けて、方々に村をつくりました。アイヌ民族たちは《フレナイ》(虻田)の村に集まり、村をもってたくさんの酒を造り、神に返礼し、方々の神々に祈りを捧げました。噴火によって死んだアイヌ民族たちの魂、その留まる魂の鎮魂のためにも酒を造り祈りました。「だから私は今でも《ウェイシリ》の神に祈りますよ。《レプンケブ》の神々、方々のたくさんの神々全部に祈ります。だからお前たちも覚えておきなさい。今は長いこと山が噴火することもないが、おまえたちも気をつけなさい」と。私はもう死ぬので、仲間たち、子孫たちに教えたのだと《フレナイ》(虻田)の村長が言いました。

出典・参考：志賀雪湖「遠島タネ媼の伝承～亮昌寺アイヌ語音声資料」
『アイヌ民族博物館研究報告第4号』（1994）

※『物語虻田町史』によると、有珠の再噴火は、1663（寛文3）年、1768（明和5）年、1822（文政5）年、1853（嘉永6）年、1910（明治43）年、1943（昭和18）年、1977（昭和52）年が記録されており、1822（文政5）年文政の噴火の頃に「この時の噴火で、今の新漁港を中心としてあった《アブタ》は壊滅的な打撃を受けて《トコタン》(廃村)と呼ばれるようになり、会所も今の神社の横に移り、ここは本来《フレナイ》の《コタン》(集落)のあった所であるが、名前は前の《アブタ》をそのままって現在の地名《アブタ》とした」とあります。遠島氏の伝承でも噴火のために《アブタ》のコタンがすっかり消されてしまったと謡われていることから、文政の噴火を知る先祖から伝えられた話だと思われま

「カムイラッチャコ（御神火）と登別温泉の神（登別温泉：登別市）」

白老《コタン》(集落)から見て西方、登別温泉の方向に当たって、昔は時々不思議な火が見えることがありました。アイヌ民族は《カムイラッチャコ》(御神火：ごしんか)と呼び、悪疫流行のお告げとしてとても警戒しました。登別温泉の神は病を治す神でありますから、悪疫流行の兆しがあれば山に火を点じ、あらかじめ知らせてくれるのだと言い伝えられ、この火を見れば疫病除けの祈りをしたといいます。白老アイヌは登別温泉の神を《ヌプルベッカムイタナカシエヌプルカムイ》「登別の聖なる山頂を守る神」と称し、神の中でも特に大切な神として《ヌサ》(祭壇)に祀ったといいます。

昔、《アイヌモシリ》(人間の国)に一人の女の子が生まれました。その子は世にも珍しいほど神々しく上品で綺麗な子どもで、両親の愛もまた一通りでありませんでした。村の人たちもこの子が成長したらどんなに美しい《ピリカメノコ》

(美しい娘)になるかと、寄ると触るとその噂で持ちきりでした。しかし、6、7歳の頃からガンベ(皮膚病の一種)にかかり頭から顔まで一面にひろがり、いろいろと手当てもし、あらゆる薬もつけましたが、治る様子もなくひどくなる一方で、両親はもちろん村の人びとも《カムイノミ》(神への祈り)を続けましたが、それも効き目がなく、後には目まで腐ってしまい二目と見られない形相となりました。

この女の子が17、18歳になる頃、ある日、神隠しにでもあったように姿を消してしまいました。手を尽くして方々探したが、どこへ行ったか杳として消息がわかりません。多分醜い自分の容姿を恥じて行方をくらましたのだろうということになり、両親も泣く泣く諦めていました。しかし、これは神があまりに女の子が綺麗なため、このままにしておいて人間の垢をつけられるのは惜しいと思い、病気でもガンベでもないのに他の人々の目にはガンベに見えるようなさったことで、行方不明になったのも神の国に呼び寄せられ、その神の妻になったからだったのです。

神の国で6人の女の子を生み、やがてその子たちが大きくなって、それぞれ神様の所にお嫁に行きました。長女は《ヌプルベツ》(登別)の奥の高い山にいてこの付近を守る神様となり、母が人間世界にいるとき、病気と見られ長い間苦勞したのを思って、この登別温泉の主となり、世の多くの人たちのあらゆる病気を治してやる神となりました。以来、アイヌ民族はヌプルベツ温泉に入浴する場合、必ずこの神に《イナウ》(御幣)を捧げ、病気全快を祈祷した後、入浴するのが習慣となりました。登別温泉はこの神のご利益で何病にも効きますが、ことに母神の病気であった皮膚病には効験が一層あらたかであると言い伝えられています。

なお、妹たちも、次女は小樽の祝津、三女は積丹のお神威、四女は《エンルム》(室蘭の絵鞆)、五女は室蘭の地球岬、六女は《ヤングウシ》(矢越)に皆それぞれ嫁ぎ、そこの守護神となったといえます。

出典：満岡伸一著『アイヌの足跡』(2003)

日高地方に伝わるアイヌの民話（日高地方）

日高地方では、古くからアイヌ民族が暮らし、特色ある文化をはぐくんできました。たとえば、人と自然とのつきあい方や、生活の知恵が盛り込まれたユニークなお話がたくさん伝わっています。その中から、自然との共生を大切にした暮らしぶりが感じられる物語をご紹介します。

ブクサの神の怒り

ある村に心がけの良い働きものの娘がいました。

畑で仕事をしていると、萩（はぎ）の神が娘に、村長（むらおさ）の家に行くようにささやきました。急いで行ってみると、村長の妻は重い病気になり、たったいま亡くなったばかりのところでした。すると今度は、その家の鍋（なべ）の神が娘に、村長の妻が死んだ理由をそっと教えてくれました。

それは、村長の妻が、山で《ブクサ》（ぎょうじゃにんにく）やほかの山菜をとるときに、いつも根だやしにとりつくしたので、《ブクサ》（ぎょうじゃにんにく）の神が怒り、誤りに気づかせようと重い病気にしたからだということです。

これを聞いた娘が、鍋の神が教えたとおりのおまじないをし、《ブクサ》（ぎょうじゃにんにく）の神の怒りをしずめると、村長の妻を生き返らせることができました。

助かった村長の妻は、娘の話聞き、自分がしたことを悔いあらためました。

また、そのあと、娘はとても豊かになり、一生幸せに暮らしたということです。娘はよく働くうえに心がけも良く、山に山菜をとりに行っても、《ブクサ》（ぎょうじゃにんにく）などをとりつくすようなことは決してしなかったので、いろいろな神が助けてくれたのでした。

だから、山菜とりに行っても、全部を根だやしにとるようなことをしてはいけませんよ。

このように、アイヌ民族の昔話には、自然を大切にする精神を教えるものが多いのです。みなさんも、村長の妻のように、ならないようにしましょうね。

参考：萱野 茂 著『アイヌの昔話』（平凡社）

キツネのチャランケ（談判）

サケが川をたくさんのぼってくるようになった秋の夜のこと、《アイヌコタン》（村）の長（おさ）が川辺を歩いていると、なにやら声がします。だれだろうと月明かりをたよりに目をこらすと、そこにいるのは一匹のキツネでした。キツネは村長に何かを訴えたがっている様子です。不思議に思いながらも耳をすましてよく聞くと、キツネが言いたいことがわかってきました。それは、こういうことだったのです。

「アイヌよ。人間よ。よく聞け。きょうのひるごろ、おまえたちアイヌがとっておいたたくさんのサケの中から一匹だけちょうだいした。それに気づいた一人のアイヌが、聞いたこともないような悪い言葉でののしった。それは、人間が言えると思うありったけの悪口だった。そのひどい言葉は、まるでどす黒い炎のようにおそいかかってきたのだ。

それにしても、サケは人間がつくったものではあるまいし、キツネがつくったものでもあるまい。川辺で暮らしている生き物たちのために、神がたくさんのぼらせているものを、腹をすかせたキツネが一匹とったからといって、あの仕打ちはひどすぎるのではないか」

これを聞いた村長は、キツネの言い分ももっとだと思いました。そして、朝になるとキツネの悪口を言った者を呼び、キツネの話を伝えてしかり、これからはそのようなひどいあつかいをしないように教えさとししました。また、村人が皆で《イナウ》（御幣）とお酒をキツネの神に捧げて、ていねいなお祈りをし、サケを自分たちだけのもののようにしたことをわび、これからはそのような振る舞いをしないことを誓いました。

「だから今いるアイヌたちよ、魚や木の実を決してわたしたち人間だけが食べるものと考えてはいけな、と年老いた村長が語りながらこの世を去りました」。昔話の多くが、このような言い方で教訓を伝えながら終わります。

サケなどの自然の恵みをほかの動物たちとも共有しようという、また一匹のキツネの主張に対してもまともに耳を傾けようとする、アイヌ民族の伝統的な精神を伝えているお話の一つですね。

また、このような守るべき精神道徳をそなえた人を《アイヌ ネノアン アイヌ》、つまり「人間らしい人間」と呼んで尊敬するのが、アイヌ民族の考え方なのですよ。

参考：萱野 茂 著『キツネのチャランケ（談判）』、同『アイヌとキツネ』（2冊とも小峰書店）